

# 沼南町石揚遺跡出土の花積下層式土器

安 井 健 一

## 目 次

1. はじめに	43
2. 石揚遺跡の概要	43
3. 花積下層式土器の細分	44
4. 出土資料の位置づけ	46
5. まとめ	57

## 1. はじめに

前期初頭の花積下層式土器の資料および該期の遺跡は、先行する条痕文系土器や後に続く羽状縄文系土器に比べて極めて少ないが、千葉県においてもそれは例外ではない。1987年時点で千葉県下において花積下層式土器を出土する遺跡は、幸田貝塚や新田野貝塚など重要な遺跡をあわせてもわずか42ヶ所を数えるのみである<sup>(1)</sup>。特に千葉県では、早期末より前期の関山式にいたるまで、西関東地方に比べて資料数が著しく少なく、編年を組み立てる上で困難さが伴う。しかし、近年になって千葉市浜野川神門遺跡のような、花積下層式土器の良好な資料も増加しつつあり、千葉県方面においても前期初頭の土器編年について考察を進める必要がある。そうした状況の中で1989年から1990年にかけて調査された沼南町石揚遺跡は、花積下層式を中心とした千葉県では数少ない集落遺跡である。この遺跡で出土した資料は今後千葉県方面における前期初頭の土器編年を考える上で重要な資料になると思われるので、ここで紹介したい。なお、本来このような考察は報告書にある程度まとまった形で収録すべきなのかもしれないが、諸事情によりほとんどできなかつた。小論はそれを補う意味で書いたものであり、調査報告書と一体のものであることを断っておく。

## 2. 石揚遺跡の概要

石揚遺跡は沼南町泉字石揚に所在し、手賀沼の南岸の標高20mほどの台地上に位置する。千葉県教育委員会による少年自然の家建設に先行して、1989年12月から1990年10月まで29,360㎡が、(財)千葉県文化財センターによって調査された。調査の成果として、旧石器時代石器集中地点28ヶ所、縄文時代竪穴住居跡27軒(条痕文系4軒、花積下層式期21軒、黒浜式期1軒、称名寺式期2軒)、縄文時代の土坑176基(陥穴21基、炉穴36基、後期初頭の円形土坑69基など)、縄文時代早期から前期にかけての遺物包含層、弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓5基、古墳時代中期を中心とした竪穴住居跡28軒、古墳2基などが検出されている。遺構は台地全体に広がっているが、花積下層式期の遺構に限ると、全て調査区の東側に集中している。方形周溝墓以降につくられた遺構によって切られているものも多いため、破壊されたり遺存状況の悪い遺構も存在するが、全体としては変則的ながら環状に分布している。調査報告書は1994年3月に刊行されており、基本的な事実記載および遺構や遺物の実測図、拓影図、写真図版などは全てそちらに掲載しているため、ここでは説明上必要な資料の実測図、拓影図のみを分類基準別に並べ直した上で再掲載し、それ以外は全て省略した。なお、文中に報文・・・とあるのは、全て調査報告書の第・・・図という意味である。

### 3. 花積下層式土器の細分

石揚遺跡の資料を検討するに先立って、従来の編年研究について簡単に触れておきたい。ただし、花積下層式土器を研究する上で欠かせないテーマの1つに、早期末の土器群からいかにして花積下層式土器が成立するかという問題があるが、今回の資料からは考察するのが難しいため省略した。したがって、本来必ずとり上げるべきであろう神奈川県菊名貝塚の資料とその報告およびそれに対する考察なども省略している。そのためここでは花積下層式土器そのものの細分についてが焦点となるが、今回は特に下村克彦氏の論攷<sup>(2)</sup>と、小出輝雄氏の論攷<sup>(3)</sup>を参考にして考察した。下村氏のもは千葉県新田野貝塚の資料を分析した研究であり、小出氏のもは埼玉県打越遺跡の調査を通じて進められた研究である。注目すべきは両者とも菊名貝塚の報告書が刊行された1980年前後に発表されており、この時期に早期末から前期初頭の編年を組み立てようとする機運が生まれていたことが想像できる。その後10数年の間に、御多間に漏れず資料の大幅な増加により、多くの新しい知見と多様な問題点が生まれるところとなった。そうした成果をふまえたものが1994年2月に行われた縄文セミナーの会によるシンポジウムであり、東日本の主要な地域ごとに縄文前期の編年について一定の見通しが得られることとなった<sup>(4)</sup>。ここでは下村、小出両氏の研究について簡単に振り返り、1994年のシンポジウムの成果をふまえて問題点についても若干ふれておきたい。

#### (1) 下村、小出両氏の論文について

下村氏は新田野貝塚出土資料のうち、頸部より上ないしは口縁に近い部分に蕨手状の捺糸側面圧痕と円形刺突により構成された口頸部文様帯が確立された段階を「新田野段階花積下層式土器」と呼び、花積下層式土器の中で最も新しい段階に位置づけ、次の二ツ木式土器および関山式土器との関連を分析している。この論文は花積下層式土器全体の段階区分を目的としたものではないため、成立段階のことについては触れられていないが、文様帯の構成と文様技法との関係から分析していく方法は説得力がある。ただし、縄文や貝殻文など他の文様技法をもつ土器（下村氏はこれらを粗製系土器と呼んでいる）との関連が明らかにされないため、「新田野段階花積下層式土器」の全体像が浮かんでこない。言い換えれば、特定の文様構成要素をもつ土器（下村氏の言う精製系土器）の変遷のみをもって段階区分の根拠とすることは疑問が多い。なお、この論文で「新田野段階花積下層式土器」と同様に多く論じられている二ツ木式土器について、本論では直接関係ないため省略するが、その実体についてさらに検討が必要であろう。

小出氏は各遺跡の資料の文様技法を概観した上で、それぞれの文様技法の組み合わせと消長をもとに3段階に分類している。簡単に述べると、第1段階は、桑山氏によって「菊名式」と定義されていた条痕文、「凸隆帯」・「波状山形文」をもつ土器群に、無文、無節縄文、単節縄文、

貝殻文を加えた土器群で、早期末より引き継がれた隆帯文、波状沈線文、条痕文に加えて北関東以北の影響を受けた縄文や独自発生したと思われる貝殻文が施文技法として加わるとみられる。第2段階は、隆帯文、波状山形文が姿を消し、捺糸圧痕文が登場するもので、無節縄文、単節縄文、貝殻文は引き続き存続するものの、無文、条痕文は極めて少なくなる。また、捺糸圧痕文は東北地方にその系譜を求めることができるが、この段階ではまだ蕨手状にならない。第3段階は、蕨手状の捺糸圧痕文が主となり、縄文は単節縄文がほとんどとなるほか、ループ文や入り組み文なども使用されるようになる。この論文で重点が置かれているのは花積下層式土器成立に関する分析であり、成立後の段階区分に関してはそれぞれの構成要素あるいは文様技法の組み合わせや多寡による分析を主眼としている。したがって各々の技法がどのような器形と組み合わせられ、どのような文様帯構成をとり、どのように変遷していくか、あまり明らかにされていない。特に羽状縄文の成立に関する点は、まだ資料が少なかったせいかほとんど触れられていない。また、捺糸圧痕文は蕨手状になるものとならないものという区分をしているが、漠然としていてそれぞれ具体的にどのような文様形態になり、どのように変遷していくのか明らかではない。しかし、花積下層式土器を構成する諸要素を要領よく抽出し、編年を分析する手がかりを与えたという点で重要である。

## (2) 現在の動向

1994年に行われた縄文セミナーの会によるシンポジウム「早期終末・前期初頭の諸様相」は、それ以降の資料の増加をふまえた上で、主要な資料を網羅し、また、現段階での研究の成果をおおむね総括したものとなっている。今回はテーマが限定されているため、特に参考とした論文2点についてのみ考察する。

谷藤保彦氏による群馬県内の資料を中心とした細分は、花積下層式を3段階に分類し、それに後続するものとして二ツ木式を設定している。以下、その内容を記述する<sup>(6)</sup>。第I段階は、平口縁、尖底を主体とし、口縁部の幅の狭い文様帯に菱形、弧状、渦巻き、交差する矢羽根状の捺糸側面圧痕が施され、縦位菱形を構成する異方向縄文あるいは羽状縄文が施される。第II段階は、平口縁と尖底を主体とするが、平口縁が増加し始める。渦巻、菱形の捺糸側面圧痕を中心とした口縁部文様帯は広くなり重帯化して、隆帯によって区画される。縄文は羽状縄文が主体となる。なお、谷藤氏はさらにこれが2段階に細分される可能性があるともみなしている。第III段階は、折り返し口縁と平底が主体となり、口縁部文様帯と頸部文様帯が分離する。捺糸側面圧痕は平行、菱形、円形刺突を抱いたループ文が現れ、胴部は幅の狭い羽状縄文となる。花積下層式の次の段階として設定された二ツ木式では、波状口縁が顕著になり、口縁部が外反する器形が多くなる。口縁部文様帯はループ状捺糸側面圧痕と円形刺突によって構成され、キザミをもつ隆帯によって区画される。胴部は幅の狭い結束羽状縄文が施される。ここで言うルー

ブ状の捺糸側面圧痕とは、蕨手状の圧痕のことと理解される。この二ツ木式の特徴は、実は「新田野段階花積下層式」そのものである。谷藤氏も「新田野段階花積下層式」は二ツ木式に含まれるとみなしている。下村氏は二ツ木式土器について、蕨手状の捺糸側面圧痕と円形刺突、隆帯に加えて円形の貼り付け瘤が併用される段階とみなし、「新田野段階花積下層式」から関山式への形式の変遷を考察している。その他、二ツ木式に関して述べられているものはいくつかあるが、捺糸圧痕文と貼り付け瘤とを併用する段階であるという点についてはおおむね一致を見ている<sup>6)</sup>。しかし、谷藤氏はその点については一切ふれていない。

金子直行氏は埼玉県の資料を中心として早期末と花積下層式土器の成立期について考察している<sup>7)</sup>。ただしそのほとんどは早期末の捺糸圧痕文と羽状縄文の発生を主眼としており、花積下層式自体は3段階に細分されると述べられているものの、細かい内容については論旨からはずれるためほとんどふれていない。しかし、谷藤氏の考察ともども従来論じられることの少なかった羽状縄文の発生とその段階分類についての見通しが得られ、あわせて捺糸圧痕文との関係について総合的に論じられることとなった。また、捺糸圧痕文の発生を早期末に求め、下吉井式古段階で口唇部直線捺糸側面圧痕が発生するとしている。ただし、両者の意見を比較すると、先程述べた二ツ木式の認識をはじめとして、細分した形式の把握についての違いが課題として残されている。

## 4. 出土資料の位置づけ

### (1) 検討の方法について

すでに言われていることであるが、花積下層式土器は多様な要素が複合されて成立した土器形式である<sup>7)</sup>。それら個々の要素を追跡してその変遷から考察するだけでなく、それら複数の要素の総体としての形式が、どのように構成されているかを検討する必要がある。しかし石揚遺跡においては、いわゆる一括資料として良好な状況で出土した資料はほとんどなかった。そこでここでは、①特徴的な文様構成要素について、②文様帯の構成について、③器形についてという3つの切り口から検討を試みた。

### (2) 文様構成要素の分類基準

報告書に掲載した分類基準を再掲する。

#### A種 捺糸圧痕文 (第1図)

捺糸圧痕文の場合、その圧痕形態についての記述は、報告者によってさまざまである。そこで、それぞれの記述が示している資料はどのようなものか、分類基準の後に簡単に述べあわせて挿図を掲載しておく。

口縁部の幅狭な文様帯に直線状ないしは弧状の捺糸側面圧痕が見られるものをA a種とした。

典型例は菊名貝塚出土の99がある。ループ状の捺糸側面圧痕をもつものをA b種とした。典型例はやはり菊名貝塚出土の102がある<sup>(8)</sup>。蕨手状の捺糸側面圧痕をもつものをA c種、円形刺突を伴うものをA d種と分類した。蕨手状の圧痕をもつものの典型例として新田野貝塚資料があるが、後述するように石揚遺跡の資料は典型的な蕨手状圧痕にはなっていない。当遺跡の土器は、捺糸をループ状に圧痕するものがほとんどであったが、円形刺突を伴うものも若干ながら出土している。なお、最古段階として渦巻き状の圧痕が施されるものが位置づけられているが、石揚遺跡では出土していないため省略した。

#### B種 縄文 (第2図)

縄文を施した土器のうち、単節縄文が施されるものをB a種、無節縄文が施されるものをB b種、組紐文が施されるものをB c種、2種類以上の施文法を複合して使用するものをB d種として分類した。

#### C種 貝殻文 (第3図)

花積下層式土器を特徴づける施文法として、捺糸圧痕文と並んで貝殻文があげられる。ここでは次の3つに分類した。遺構出土の土器も、この分類に従って記述している。貝殻を土器の器面全体に密にかつ同一方向に施文するもので貝殻背の腹縁に近い部分を圧痕するものをC a種、貝殻の施文がかなり雑になり全体にまばらで方向もそろわなくなるものをC b種、貝殻文独自の効果をねらったと思えるもので貝頂部による圧痕を特徴とするものをC c種とした。

#### D種 集合沈線文 (第5図65~77)

折り返し口縁をもつ土器で、口縁部文様帯に集合沈線文を使用するものを一括した。

#### E種 網状文 (第5図78~81)

捺糸の網目状絡条体を回転施文したものの。

#### F種 条痕文 (第5図82)

一見すると早期の条痕文に類似するが、胎土が全く違うほか、貝殻背圧痕がみられるもの。

#### G種 隆帯文 (第5図83~85)

隆帯そのものは他の文様要素と組み合わせられていることが多いが、ここでは隆帯そのものを中心としたもの。

#### H種 無文 (第5図86~90)

条痕文形土器の無文土器と似ているが、胎土が明らかに違うほか、器形で判別できるもの。

これらの分類案は文様構成要素のみを基準としたものであり、文様帯の構成や器形とのつながりをほとんど無視している。そのため土器形式を包括的に捉えられないのではないかという疑問もあるが、文様帯や器形の全体をうかがえる資料に恵まれなかったこと、そして何よりも筆者の力量上の問題により、かなり割り切った基準を設定することによって整理作業を迅速に

進めようとしたという事情がある。今後検討を加える必要を痛切に感じている点である。

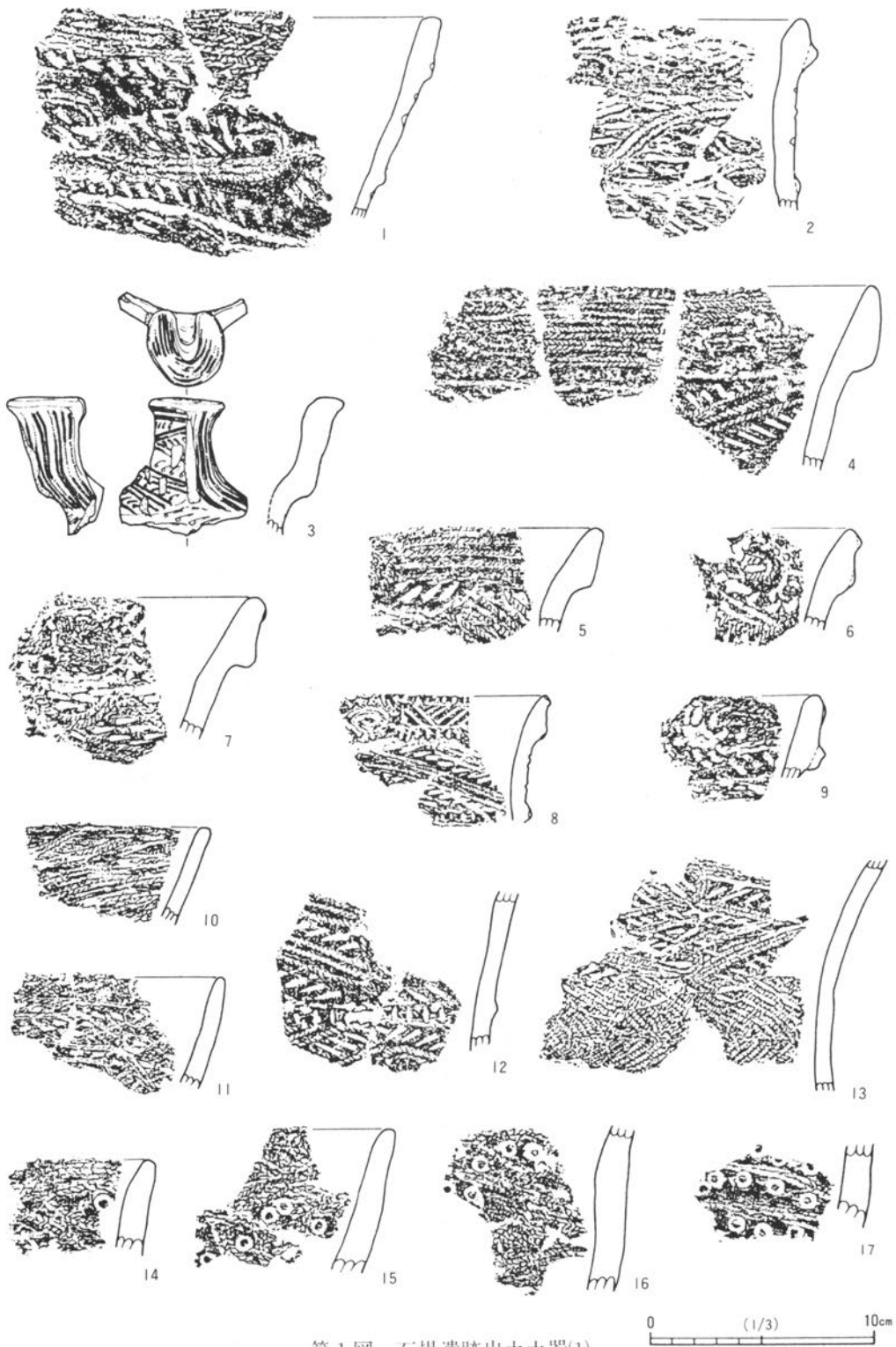
なお、関連資料として図6に菊名貝塚の各時期の資料を、図7に石揚遺跡の資料と同時期に位置づけられる他の遺跡の資料(124~132)、「新田野段階」(133~136)、「ニツ木式」(137~140)、関山式(141~146)の関連資料を掲載した。これら花積下層式の終末から関山式の成立に関する分析もこれからの課題である。

### (3) 各文様構成要素についての検討

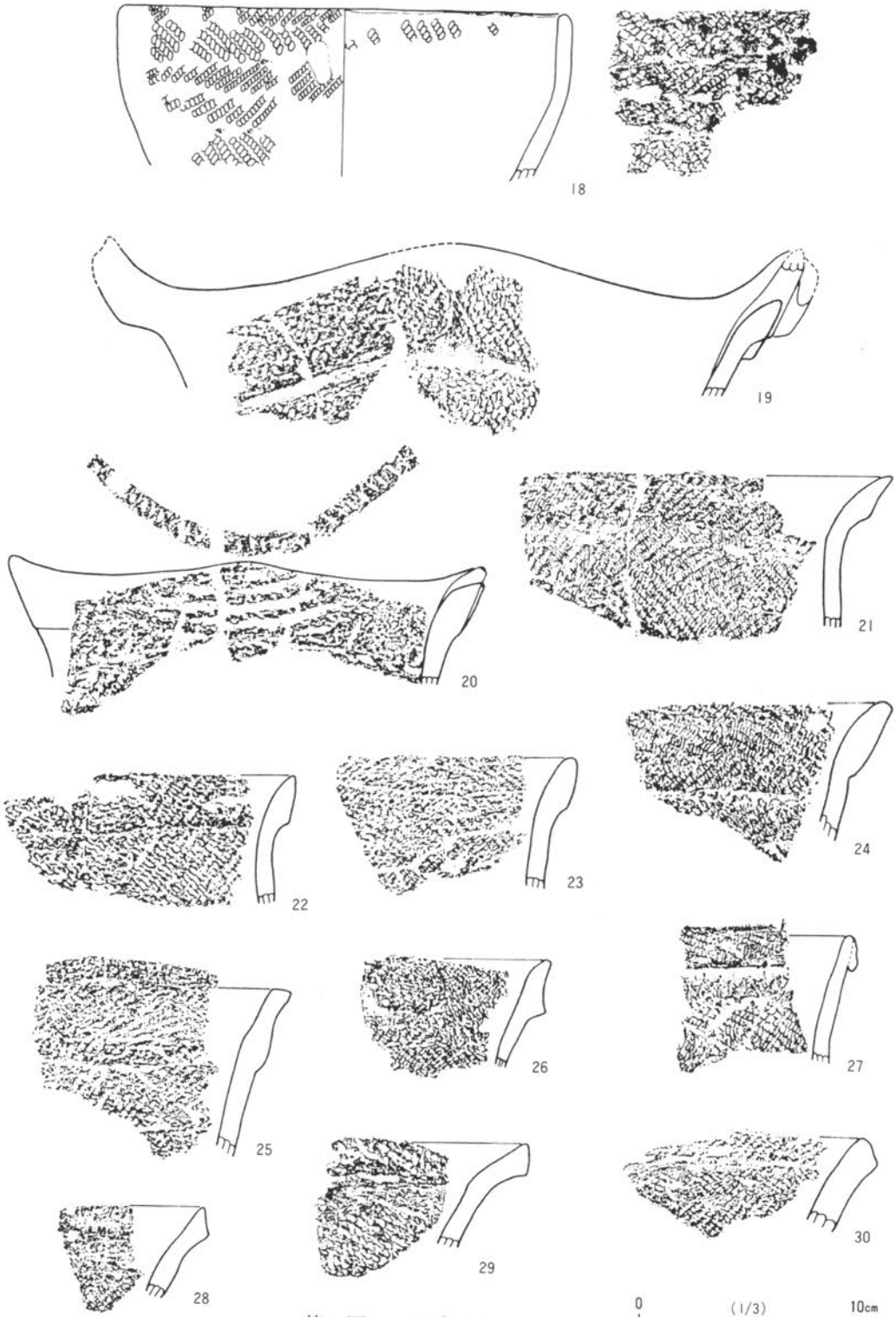
捺糸圧痕文土器のA a種からA d種という分類は、時期順を想定したものである。A a種とした2(報文第213図032-12)・10(報文第221図19)は口縁部の幅狭な文様帯に直線状ないしは弧状の捺糸側面圧痕がみられるもので、谷藤案では第II段階に位置づけられるものである。ただし前者では文様帯の重帯化の兆しも見られ、やや新しい段階に属すると思われる。類似した文様をもつ資料としては菊名貝塚2号土器があるが、そちらは折り返し口縁である。A b種はいずれも折り返し口縁をもち、ループ状の捺糸側面圧痕文と刺突列によって構成された同じパターンの文様が重帯化して胸部上半分を覆っているもので、谷藤案では第III段階に位置づけられるものである。3(報文第221図2)はこの文様形態を踏襲した把手であるが、関山式に見られる片口土器の原形になるものかもしれない。類似例は群馬県三原田城遺跡に見られるが(124)、この資料もループ状の捺糸側面圧痕文によって構成された文様帯が重帯化しているものである。この段階になると、多種多様な器形が生まれてくるのがうかがえる。A c種とした1(報文第209図010-1)・11(報文第221図20)の位置づけは難しい。前者は捺糸側面圧痕がループ状とも蕨手状ともつかない中途半端な様相を呈している。折り返し口縁や重帯化した文様帯など、器形の上ではA b種に含まれるものであるが、直線的に立ち上がる器形や口唇上の平らなそぎ落としなど、やや異質な要素もみられる。後者は口唇直下に縄文が施され、その下に連続刺突を伴う捺糸側面圧痕が施されているもの。両者ともループ状から蕨手状への過渡的様相をもつものであろう。その一方で1・4(報文第221図1)・5(報文第221図7)などでは、折り返し口縁上に直線の捺糸側面圧痕文が平行に施される。このモチーフ自体は早期末に発生したものと考えられるが、直接つながりのあるものかどうかは検討を要する。ただしA a種と分類した2に見られる、貼り付け隆帯と口唇との間の直線状の捺糸側面圧痕は、早期末より継続していると考えられる。円形刺突のみられるA d種が、これらの中で最も新しい部類に属するのは間違いのない。捺糸側面圧痕文と組み合わせられた円形刺突が、関山式における円形貼り付け瘤の祖形となるものであろう。ただし、石揚遺跡の資料では円形刺突の配置には規則性が見られず、その点からも新田野段階とは区別されるべき位置にある。

縄文が施文された土器のうち、単節・無節に関わりなく圧倒的多数を羽状縄文が占める。その多くは、捺りの方向を逆にした異なる原体を使用して横方向に施文するものである。21(報

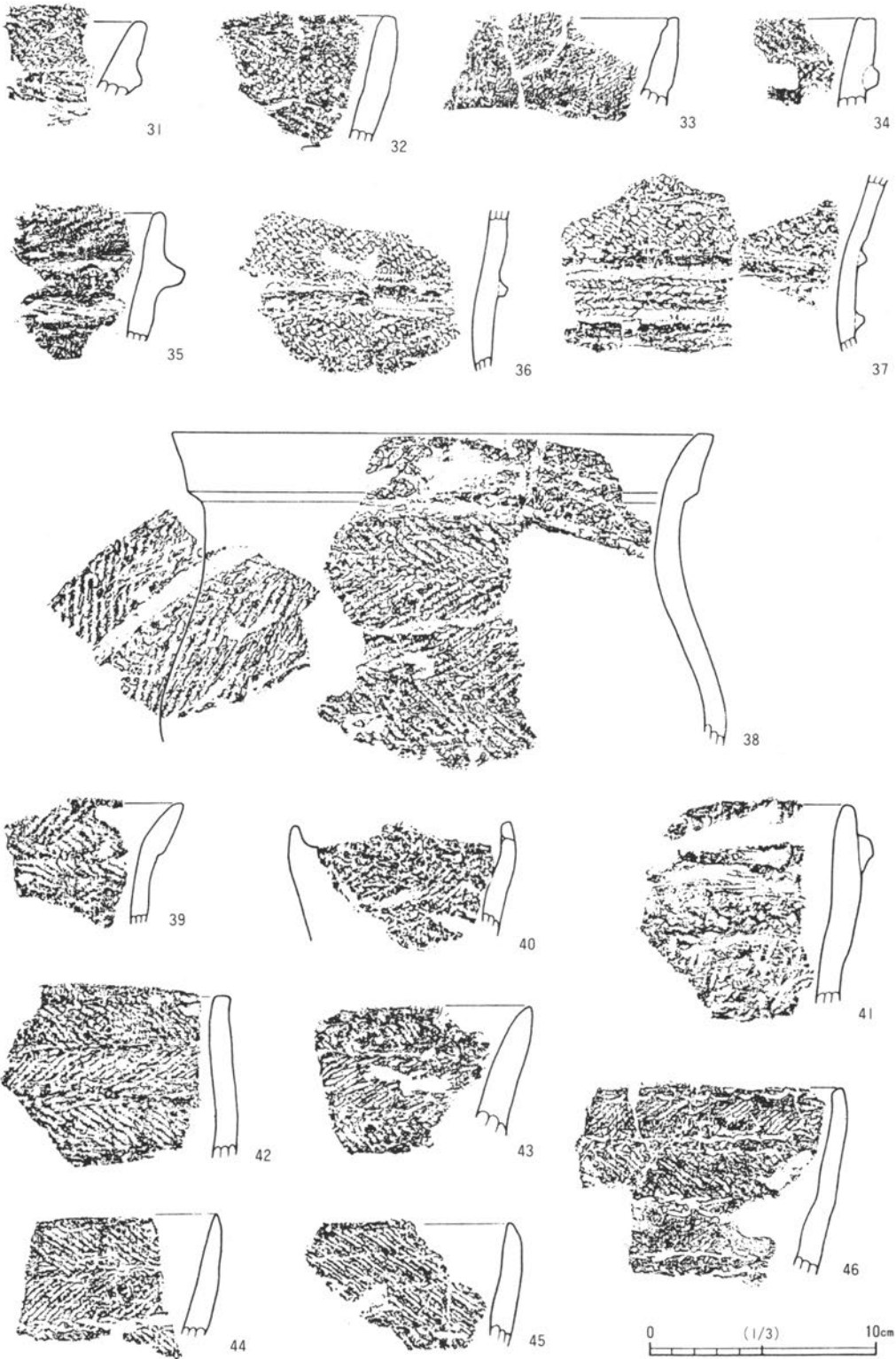




第1図 石揚遺跡出土土器(1)



第2図 石揚遺跡出土土器(2)



第3図 石揚遺跡出土土器(3)

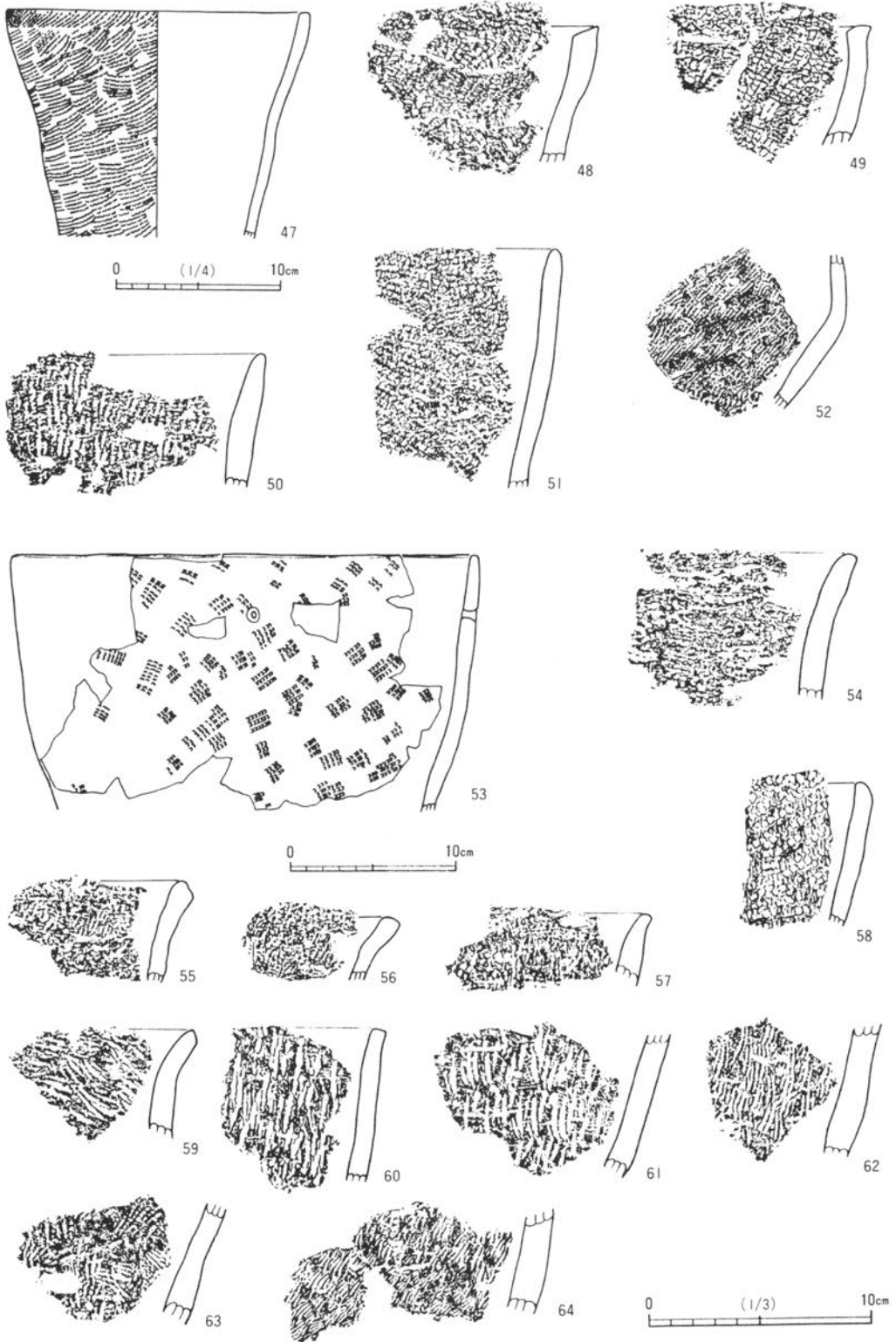
文第209図010-2)の羽状縄文は同一原体を縦横直角方向に施文するものであるが、こうした例は極めて少ない。また、早期末に見られる菱形状の異方向縄文は皆無である。これらの事実から、羽状縄文が安定した段階にあるとみなすことができる。ただし、18(報文第215図048-1)にみられる器面内側の縄文施文は古い要素の残存とみられる。

貝殻文は従来から縄文の模倣であるといわれ<sup>9)</sup>、事実C a種などは拓影図を見た限りでは、縄文と見分けがつかないくらいよく似ているものも存在する。その一方でC c種の場合、縄文の模倣とはとても言えず、縄文施文とは明らかに異なる文様効果を生み出すことを意図したものと見える。F種条痕文と分類した土器には、条痕と貝殻圧痕との併用が見られるが、貝殻圧痕の形態は明らかに貝頂部を圧痕したC c種と同類である。条痕文は貝殻背によって施されるものであり、花積下層式の貝殻文とは技法的にはかなりつながりが強いものがある。したがって、貝殻文は縄文の一方的な影響のみから発生したのではなく、縄文と条痕文の双方の影響のもとに発生したとも考えられよう。菊名貝塚出土の隆帯をもつ土器には貝殻背圧痕による装飾が多く見られ、技法的なつながりを認めることができる(105~107)。

集合沈線の位置づけについては従来あまり言及されなかった。桑山氏は菊名貝塚においては貝殻文、無節縄文、単節縄文、無節・単節併用、撚糸圧痕文の5種とのみ併用されているとしているが、図版を見る限りでは単節縄文と撚糸圧痕文との併用がほとんどである(102・111・112・116)。そして多くは折り返し口縁の口縁部に施文される。石揚遺跡の資料もその点は同じ傾向がみられた。8(報文第215図048-10)の資料はその典型例といえる。その祖形について、木島式にみられる細密条線によって描かれる鋸歯状の文様(121)とのつながりを指摘することができるが、木島式においては鋸歯状の文様が出現するのはかなり新しい段階とみなされているようで<sup>10)</sup>、どちらが祖形になるかについてははっきりと結論づけることはできない。

網状文は、木島式とのつながりが最も強い文様構成要素と考えられる。菊名貝塚にみられる胴部に網状文が施された資料などをみると、文様の施文効果の共通性だけではなく器形の上からも関係の強さがうかがえる(109・110)。ただし木島式の格子状の細密条線(120・123)は、花積下層式の最も新しい段階と平行するとみなされているようであるが<sup>10)</sup>、「新田野段階」には網状文は見られず、その位置づけにはなお検討が必要である。石揚遺跡の資料は菊名貝塚のものとは違って、折り返し口縁の口縁部に施文されるものが多く、胴部に施文されるものは必ず縄文と併用される。なかには80(報文第232図13)のように、同じ口縁部文様帯上で網状文と縄文が並んで施文されているものもある。全体の文様構成を伺うことはできないが、網状文に関する限り施文技法以外の点においては、特に器形に関しては菊名貝塚や木島式などとの共通性はうすいように見える。これが千葉県方面の地域的な様相なのかどうかは定かではない。

条痕文土器は、胎土、焼成、貝殻背圧痕の存在といった点で早期の条痕文とは区別される。



第4図 石揚遺跡出土土器(4)

82は口唇上のキザミが貝殻腹縁によって施されているが、菊名貝塚からは貝殻腹縁によるキザミが入った隆帯をもつ資料が出土しており、施文技法上の共通性を見いだせる(104)。先述したとおり貝殻圧痕の形態は貝殻文C種で、貝殻文とのつながりを考えることもできる。

隆帯文は早期末葉の影響のもとにある文様構成要素であるが、それが花積下層式土器の中でどのような変遷を経ていくかについて、今回の資料だけで考察するのは難しい。今回提示したキザミのある隆帯をもつ資料からだけでは、早期末の土器からの直接のつながりを論じることはできないが、あえて言うならば菊名貝塚出土の、棒状工具による斜めの沈線を並べた隆帯をもつ土器とのつながりが考えられよう(114・115)。

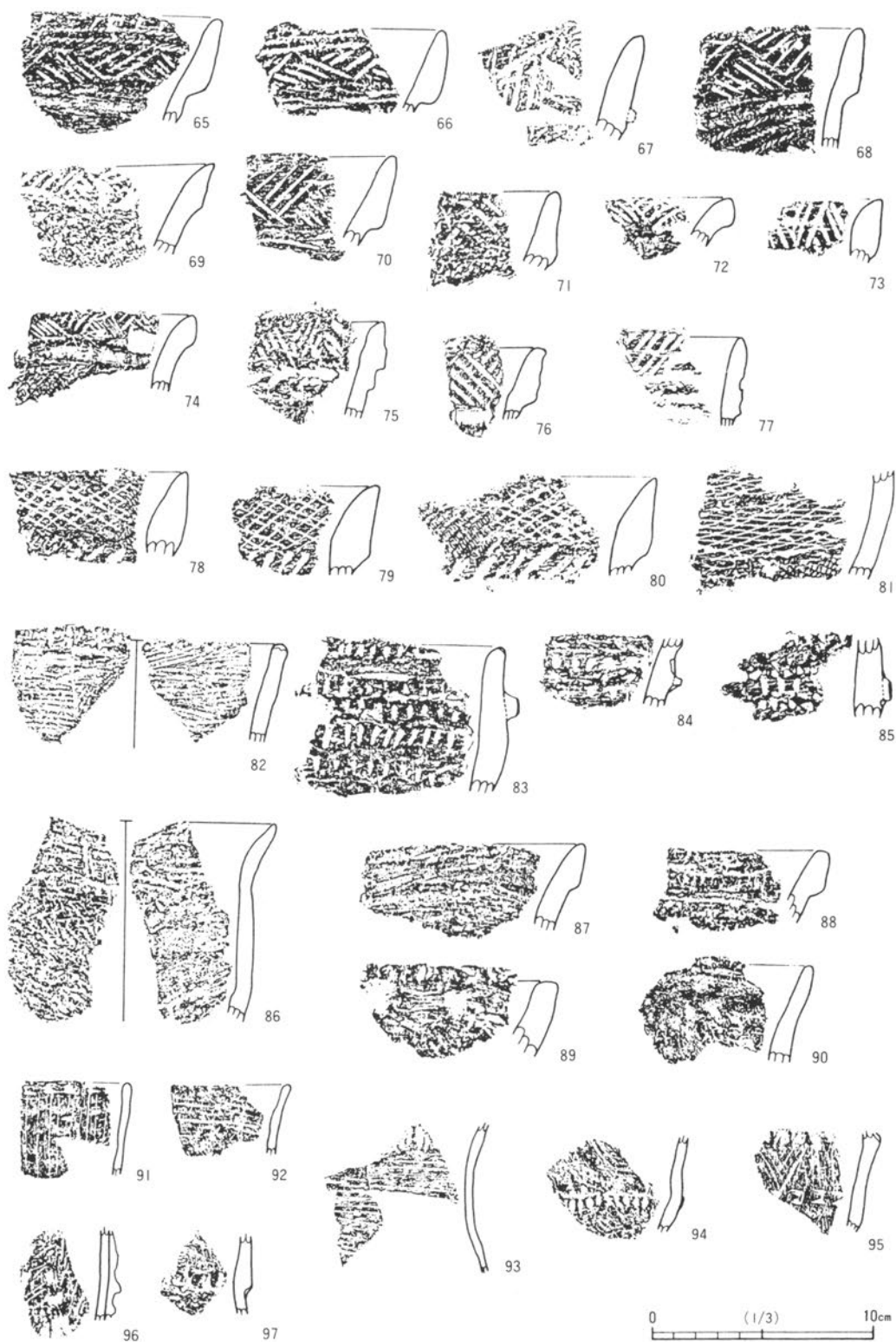
無文土器は数は少ないものの一定量の出土が見られる。従来は古い段階には多く新しくなるに従って少なくなっていくとみられていたが<sup>(93)</sup>、87・88(報文第233図2・3)のような折り返し口縁をもつ資料が存在すること、86(報文第233図1)のようなやや強く外反する波状口縁の資料が存在することから、古い段階から最終段階にいたるまで、コンスタントに存在したとみなすこともできよう。

なお、木島式土器もさほど多くはないが出土している(91~97、報文234図)。いずれも指頭圧痕をもつ貼り付け隆帯と横ないしは縦方向の細密条線との組み合わせであり、また、96のように波状口縁の波頂部より縦方向の貼り付け隆帯を垂下させるものを伴うことから、花積下層式の新しい段階と平行するものと思われる。91は口唇部に列点状のキザミが入るもので、木島式の最終段階に位置するものであろう。

最後に内面の調整について簡単に触れておく。器面の内側に縄文が施文されるのは18のみであるが、条痕が施されるものは少ないながらもいくらか存在する。条痕文土器や貝殻文の土器に多いのは、施文技法の共通性を考えると当然であろう。撚糸圧痕文や縄文施文の土器になると、ミガキ状の丁寧な調整を施したものが多くなる。

#### (4) 文様帯の構成について

撚糸圧痕文土器、特にループ状の圧痕が施される土器をみると、全体をうかがえる資料が少ないものの、基本的には102と同じく胴部下半まで同じパターンで文様帯が多段で幅の広い文様帯を形成しており、口縁部ないしは頸部文様帯と呼ぶべき部分をはっきり定義することができない文様構成をしている。こうした特徴をもつ段階を谷藤氏は第3段階とみなしており、この点では口頸部文様帯の確立する新田野貝塚の資料とははっきり区別することができる。菊名貝塚出土資料にはループ状にも蕨手状にもならない撚糸側面圧痕が施され、新田野貝塚の資料と同じく折り返し口縁にならない波状口縁の深鉢で口縁部文様帯が形成されているものがある(100)。また、同様な器形をして口縁部文様帯が形成されていて、ループ状の撚糸圧痕が施される資料も菊名貝塚から出土している(98)<sup>(11)</sup>。撚糸側面圧痕の形態のみに注目していると、このよう



第5図 石揚遺跡出土土器(5)

な資料の位置づけを誤るおそれがある。その一方で、関山式にも口縁部に幅の狭い文様帯を配し頸部より下に縄文のみを施す土器があり、これは花積下層式の折り返し口縁をもつ土器特有の、幅の狭い口縁部文様帯の系統を残していると言わざるを得ない。このような資料の口縁部文様帯には半裁竹管を鋸歯状に施文したものが多いが、これは花積下層式にみられる、折り返し口縁上に集合沈線をもつ土器との強い結びつきを考えることができる（145・146）。

#### （5）器形についての検討

花積下層式土器にはさまざまな器形をした土器があるが、それだけに文様構成とあわせて系統立てるのは困難さを伴う。ここにある資料だけで各時期の器形とその変遷について検討するのは無理があり、他の資料との比較も必要なため、とりあえず折り返し口縁について若干の考察を試みたい。

折り返し口縁は花積下層式土器の中で独自に発生した要素とみられるが、その祖形として考えられるのは、口唇直下に隆帯を配した土器であろう。27（報文第214図047-1）は折り返し口縁が貼り付けられていることを示す資料で、折り返し口縁の技法が貼り付け隆帯から通じていることがよく分かる。その他の土器の断面形態を見ても、貼り付け隆帯が折り返し口縁になるまでの段階別にいくつかの分類が可能である。時期も異なるものと思われるが、前後関係がはっきり分かる出土例を待つ必要があるだろう。その一方で、28（報文第224図33）・29（報文第224図42）・30（報文第224図43）のように強く外反する口縁の口唇上にも同じ原体による縄文が施される資料が存在する。この口唇の上下幅が広がって折り返し口縁が発生したと解釈することも可能である。この点についても、現段階ではどちらか一方の発生要因に限定する必要はなく、双方からの互いに影響されて発生したと考えておきたい。折り返し口縁の発生時期であるが、条痕文や波状沈線文では見られないこと、擦糸圧痕文で顕著に見られ、特に文様帯が重層化した段階で非常に多くなることから、後発的な要素と見る事ができる。そして、折り返し口縁の発生とともに、花積下層式土器の器形は非常にバラエティーに富んだものとなる。それまではどちらかというと、丸底ないしは平底とゆるやかに広がる胴部とやや外反する口唇といった単純な器形が多かったのが、折り返し口縁の発生とともに、極端な上げ底、下ぶくれ状あるいは段をもつ胴部、飾り把手や円形の貼り付け飾り隆帯をもつ口縁などが現れる。これは花積下層式土器文化自体の成熟を表すものといえよう。もちろん木島式など、周辺諸形式とのつながりを考える必要があるのは言うまでもない。

石揚遺跡出土の資料は、擦糸圧痕文自体は多くない。しかし、外反する折り返し口縁+羽状縄文が多く、先の考え方からいけば、石揚遺跡の資料はかなり新しい段階（谷藤案の第Ⅲ段階）に属するものが多いと結論づけられる。



## 5. まとめ

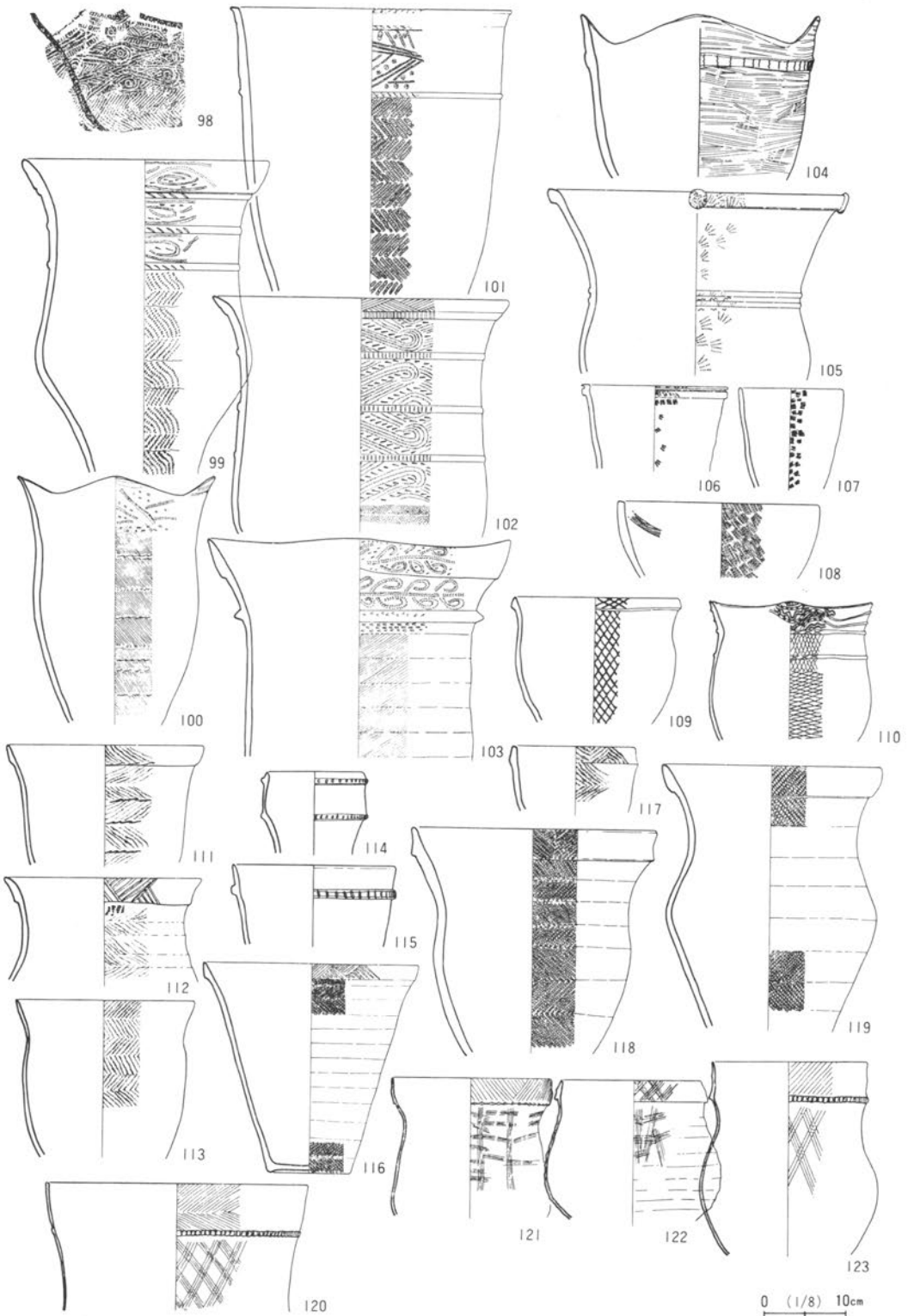
焦点の定まらない論に終始してしまった感はあるが、これらの資料から分かったことを簡単にまとめてみたい。

石揚遺跡の花積下層式土器は短い時期の間に集中するもので、成立に関わる古い段階に属するものは少なく、その一方で新しい関山式以降につながる資料も少ない。大まかな特徴として、①ループ状の捺糸側面圧痕文をもつものが極めて多く、そのほとんどは重層化する文様帯をもつ、②縄文はほとんど単節縄文で、異原体縄文を横方向に施文した羽状縄文がほとんどである、③折り返し口縁をもつものが多い、などといった点があげられる。細分案については細部で見解の相違があるものの、各説を比較検討しても、比較的新しい段階に属するものの、「新田野段階」にまでは下らないという結論が導き出せよう。同時に出土している木島式土器の編年的位置からも、それは裏付けられる。ただし若干の時期差が認められるのは今検討したとおりである。しかし、それが現段階の分類につけ加えて新しい段階を提唱できるほどのものになるかという点、それは躊躇せざるを得ない。捺糸圧痕文の形状の差異を指摘することはできたが、それが器形の変化や文様帯の構成の変化を伴うわけではなく、他の文様構成要素の変化との関わりを指摘できたわけではないからである。捺糸圧痕文土器において個々の資料の時期差を指摘できる可能性をもちながら、それぞれに伴うべき縄文や貝殻文土器その他の施文技法をもつ土器群をなお十分に明らかにし得ない。それらを把握することによってさらに形式内容を追求する必要がある。また、文様帯構成についても器形を含めて花積下層式土器全体を通じて系統だった文様帯構成の変遷を追う必要がある。花積下層式土器は多様な要素が複合されて成立した土器形式であるという言葉を用いたが、これは地域的な要素のみならず時間的な要素も含めて考えるべきものであろう。

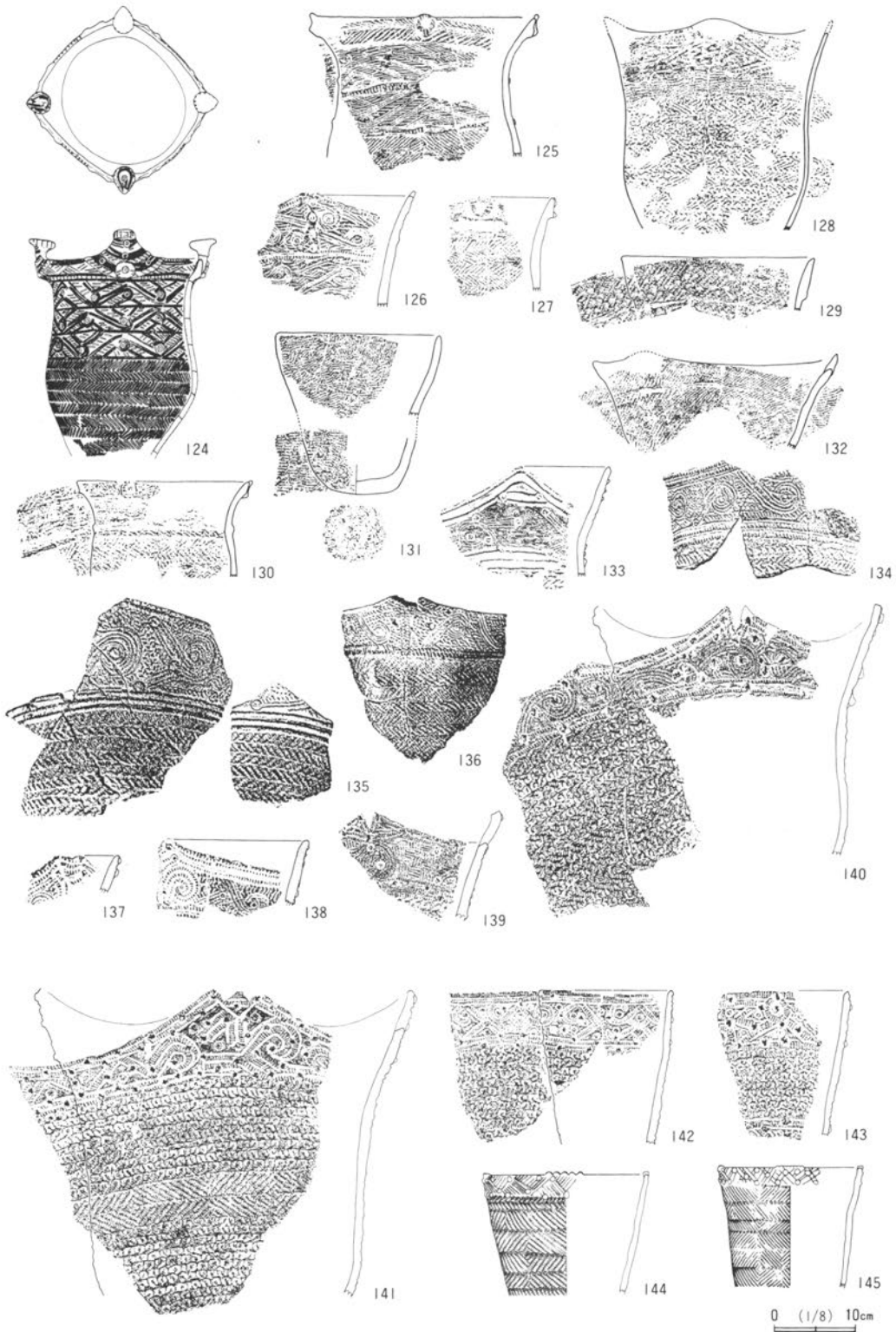
石揚遺跡の資料は花積下層式土器に対し、いくつかの知見をもたらすとともに、新しい問題点も与えている。また、従来力が入れられてきた花積下層式土器の成立と、関山式以降へのつながりについて、特に千葉県下の資料をもとに改めて分析を進める必要性を感じた。これらについて、さらに考察を進めていきたいと考えている。

おわりに、現地での発掘調査から整理作業にいたるまで多くの御指導をいただいた太田文雄、上守秀明両氏をはじめとして、下記の方々から御指導頂いた。心から感謝の意を表する次第です。

麻生優 岡本東三 白石浩之 四柳隆



第6図 関連資料(菊名貝塚出土資料、註8)



第7図 関連資料(註12)

註

- (1) (財) 千葉県文化財センター編 1988 『房総考古学ライブラリー2 縄文時代(1)』付図6参照
- (2) 下村克彦 1981 「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」 奈和第19号
- (3) 小出輝雄 1982 「花積下層式土器の成立と展開」 富士見市遺跡調査会研究紀要2
- (4) 縄文セミナーの会編 1994 『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』
- (5) 谷藤保彦 1994 「群馬県における早期末・前期初頭の土器」 註4収録
- (6) 青木秀雄他 1979 『高輪寺遺跡』 久喜市教育委員会
- (7) 金子直行 1994 「縄文早期終末から前期初頭に於ける羽状縄文系土器群の成立について」 註4収録
- (8) 関連資料としてあげた菊名貝塚の土器は、98が註11より、それ以外は桑山龍進 1980『菊名貝塚の研究』菊名貝塚研究会刊行より転載した。
- (9) 高橋雄三 1981 「花積下層式土器の研究」 考古学研究28-1
- (10) 渋谷昌彦 1994 「土器形式より見た縄文早期と前期との境について」 註4収録
- (11) 江坂輝弥 1939 「横浜市神奈川区菊名町宮谷貝塚出土土器に就いて」『考古学論叢』第14輯
- (12) 関連資料出土遺跡名 124 三原田城、125~133・137・138 浜野川神門遺跡、134~136 新田野貝塚、139~143 二ツ木向台遺跡、144・145 打越遺跡、

挿図引用文献(上記以外)

- 金丸 誠編 1989 『千葉市浜野川神門遺跡』 (財) 千葉県文化財センター  
倉田恵津子編 1987 『特別展 幸田貝塚展』 松戸市文化ホール  
小出輝雄他 1978 『打越遺跡』 富士見市教育委員会  
武井則道編 1975 『新田野貝塚』 大原町文化財審議委員会  
谷藤保彦他 1987 『三原田城遺跡、八崎城址・八崎塚、上青梨子古墳』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
寺門義範編 1991 『千葉市神門遺跡』 千葉市教育委員会

その他の参考文献

- 江坂輝弥 1951 「講座 縄文文化について(その7)」 歴史評論29号  
金子直行 1989 『荒川村下段遺跡』 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
金丸 誠編 1988 『千葉市浜野川遺跡群』 (財) 千葉県文化財センター  
菊池真太郎、清藤一順 1984 「谷田木曾地遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VIII』 (財) 千葉県文化財センター  
下村克彦他 1970 『花積貝塚発掘調査報告書』 春日部市教育委員会、埼玉県遺跡調査会  
鈴木保彦、小宮 孟 1977 「横浜市菊名貝塚出土の文化遺物と自然遺物」 神奈川考古2  
高橋雄三、吉田哲夫 1977 「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」『調査研究集録2』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団  
谷井 彪他 1980 『舟山遺跡』 埼玉県教育委員会  
藤巻幸男他 1993 『五日牛清水田遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財団法人千葉県文化財センター成田調査事務所)